琉球大学学術リポジトリ

沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究

メタデータ	言語: 出版者: 富士栄登美子 公開日: 2009-11-05 キーワード (Ja): 型染, 紅型, 伊勢型, 会津型, 美意識, 色と文様, 伝統工芸, 会津(喜多方)型, 染型, 染と織 キーワード (En): 作成者: 富士栄, 登美子, Fujie, Tomiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12989

沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究

課題番号：１７５００５０９

平成17年度～平成１９年度科学研究費補助金
（ 基盤研究（C）） 研究成果報告書
Report of Grant-in-Aid foe Scientific Research for 2005~2007
assignment number : 17500509

平成２０年　６月

研究代表者　富士栄　登美子
Head of Project FUJIE Tomiko
琉球大学教育学部教授
University of the Ryukyus

第1章　はしがき

本稿は，「基盤研究（C），課題番号：17500509，研究期間：平成１７年度～平成１９年度，研究課題：沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究」の科学研究費補助金研究成果報告書である。

第1節　研究組織

研究代表者	：	富士栄登美子	（琉球大学教育学部教授）
研究協力者	：	吉田ハルヰ	（元福島学院短期大学教授）
		小林桂子	（武蔵野美術大学非常勤講師）

第2節 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１７年度	1,000,000	0	1,000,000
平成１８年度	600,000	0	600,000
平成１９年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,400,000	240,000	2,640,000

第3節　研究発表

(1)　学会誌等

富士栄登美子，琉球絣の現在－その意匠と活用，日本家政学会誌，56 巻 5 号，2005 年 5 月 15 日

富士栄登美子，地域教材（琉球絣）を生かした中学校家庭科教育実践(1)，琉球大学教育学部紀要，第 68 集，2006 年 03 月 20 日

富士栄登美子・多喜ゆみ子，地域教材（琉球絣）を生かした中学校家庭科教育実践(2)，琉球大学教育学部紀要，第 70 集，2007 年 01 月 20 日

島袋麻美・富士栄登美子，地域教材（紅型）を生かした高等学校家庭科教育実践研究－実践事例その１，琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要，第 15 号，2008 年 03 月

富士栄登美子・吉田ハルヰ・小林桂子，沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究，科学研究費補助金報告書，2008 年 06 月

富士栄登美子・吉田ハルヰ・小林桂子・島袋麻美，沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究－紅型，伊勢型，会津型を中心に－，琉球大学教育学部紀要，第 73 集，2008 年 10 月，

(2) 口頭発表

富士栄登美子，地域教材（琉球絣）を生かした中学校家庭科教育実践－４つの動機づけの視点から－，日本家庭科教育学会，第48回全国研究発表大会（前橋テルサ），2005年06月25日

多喜ゆみ子・富士栄登美子，地域教材（琉球絣）を生かした中学校家庭科の授業研究－動機づけの視点から－，日本家庭科教育学会九州地区研究発表会（佐賀大学），2006年07月29日

Tomiko FUJIE・Harui YOSHIDA, Comparison of culture and aesthetic sense on dyeing of stencil between Okinawa and Mainland of Japan, with special reference to BIN-GATA, ISE-GATA, and AIZU-GATA, The 22nd International Costume Congress（Tainan, Taiwan ）, 2006 Aug. 26-27

富士栄登美子・吉田ハルヰ・小林桂子，沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究－伝統工芸（便型）の更なる発展への寄与を展望して－，産学官連携フォーラム（沖縄産業支援センター），2007年03月19日

富士栄登美子・島袋麻美，沖縄と本土の型染に関する文化と美意識についての比較研究－紅型，伊勢型，会津型を中心に－，日本家政学会，第60回研究大会（於：日本女子大学），2008年06月01日

島袋麻美・富士栄登美子，地域教材（紅型）を生かした高等学校家庭科教育実践研究－実践事例その２，日本家庭科教育学会，第51回全国研究発表大会（於：静岡ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝｱｰﾂｾﾝﾀｰ），2008年06月29日

第２章　研　究　目　的

沖縄の染織について，これまで研究を重ねてきた琉球絣を発表し，型染へと研究を進めた。

沖縄には紅型（びんがた）と呼ばれる型染がある。一方，本土には，伊勢，喜多方，京都，江戸などで普及した型染があり，それぞれ伊勢型，会津型，型友禅，江戸小紋などと呼ばれている。それらは同じ型染ではあるが，沖縄の型染と本土の型染には，色彩や文様，技法，道具などに相違点がみられる。

沖縄の紅型と本土の型染の特徴を明らかにし，その類似点を検討するとともに，とくに技法や道具，色彩，文様などにみられる両者の違いを明らかにし，紅型の文化と美意識を考察する。

型染についての研究は，それぞれ単独でなされることが多い。本研究は，沖縄県，

福島県，および三重県の三県を中心にした型染の比較研究するところに特色があり，本比較研究により、紅型の持つ文化と美意識を総合的に検討するところに独創性をみることができる。

従来の研究では，それぞれ個別に研究がなされてきたが，型染という同形式の染物に関する相互の類似点と相違点を総合的に比較研究した事例は，ほとんどない。本研究を通じて，とくに沖縄の紅型にみられる色彩，および本土と中国からの双方の影響と思われる文様を検討する。

このうち紅型にみられる本土からの影響と推測される文様のひとつに，「松に懸かる藤の花」がある。これは清少納言の『枕草子』に，“めでたきもの”として『花房長く咲いた藤の花の，松にかかりたる。』というくだりが紅型の文様に表現されており（富士栄，1999），沖縄の紅型が平安時代の本土文化の影響を受けている点で，極めて興味深い文様である。

本研究は，沖縄県の沖縄島を中心とした紅型，福島県の会津若松，田島，喜多方を中心とした会津型，三重県鈴鹿市の白子・寺家を中心とした伊勢型について，それぞれの色彩，文様，技法などの相違点を明らかにし，紅型の美意識について比較検討し，技法，染色法，色彩，道具，型紙の面から考察する。

本研究成果を地域に生かした視点で教材化し，学校教育（家庭科教育，総合学習，高校選択など）において授業実践し，地域での学習や学校教育に貢献する。

第3章　研　究　方　法　及び　研　究　経　過

研究の対象とした調査地域は，以下のとおりである。

1）２００５年度

福島県の会津若松，田島，喜多方を中心とした会津型

２００５年８月，９月　会津型の調査

福島県での調査は，常に研究協力者の吉田ハルヰ氏が行動を共にした。

・会津工業高等学校を訪ね，小関栄助氏より聴き取り調査，会津型紙数十枚撮影する。
・喜多方市民族資料館を訪ねる。福島県指定重要有形民俗文化財「会津の染型紙と関係資料」を見ることができた。
・奥会津歴史民俗資料館へ行き，会津型の型彫りと藍染めの体験をする。
・田島在住で型紙研究家の辺見舜夫氏を訪ねる。文献紹介，会津型の特徴の説明をもらう。
・喜多方市在住でれんが工房の冠木昭子氏を訪ねる。冠木氏は，会津型を掘り起こした人物である。蔵の里へも案内していただく。ここでも撮影が許可される。
・日本民芸館駒場へ何度も足を運ぶ。ここでは，多くの琉球絣・紅型が展示去れ，特別展「琉球の織物」の時は，部屋の壁面一杯に展示される。撮影は不許可であるが，1 枚 1000 円で撮影は許可される。しかし，絵葉書を購入して，スキャナで取り込んだ。

○ 2005 年度まとめ

(1) 東京にて：シルク博物館「世界のふろしき展」、大江戸博物館「新シルクロード展」、東京国立博　物館（以下東博とする）、東博資料館にて「紅型と会津型の特色」を拾い、沖縄の紅型は、小紋型　・中型同様、江戸時代に隆盛の兆しをみせたことを掴む。型染の発生は、正倉院の御物に型染めと　みられる布があることから、次年度は正倉院で確認。現存する型の染めの中で最も古い衣服は、二本傘文様素襖（室町）である。

(2) 沖縄島にて：沖縄県立首里高等学校染織デザイン科へ出向き、学校教育の中での紅型の扱いを調査する。知念びんがた工房を訪ねる。ここで「糸かけ」した染型紙を撮影する。

(3) 会津若松にて：会津工業高等学校で所蔵されている染型を調査。会津型の特徴を知るには喜多方へ行くようにとの助言を得る。

(4) 喜多方にて：県指定重要有形民俗文化財「会津の染型紙と関係資料」（市指定「喜多方（小野寺家）の染型紙及び関連用具」内訳）小紋、中型、縞、追掛、友禅、小本、絣がある中で最も多いのが絣型であった。織の絣とは逆う趣の染型の絣である。会津型の特徴は、この絣型とうるみ型にあることを知り、「蔵の里」でうるみ型を調査。会津型の特徴が染型を見てわかるようになった。

(5) ウイーン、ドイツにて：ウイーンのジャポニスムを見ることは出来なかったが、ドイツバイエルン・ナショナル博物館でステンシルを見ることが出来た。撮影は不許可。

(6) 会津田島にて：辺見輝夫氏宅を訪問。会津型、常磐紺型、うるみ型に関する資料収集を行う。

(7) 沖縄島にて：首里城「琉球王朝　紅型の美」展、沖縄県立博物館「柳宗悦の心と眼，柳宗悦の民藝と巨匠たち」展、文化講座「柳宗悦の仕事とその根本思想」にて資料収集。

(8) 本土の型染は単色が多い。これに対して沖縄のそれは多色染（藍型を除く）である。

(9) 文様についても本土と沖縄の型染には差異がみられ、文様の線やリズムは、そこに生きた人々の美意識が集約されていると思われる。

2）２００６年度

三重県鈴鹿市の白子・寺家を中心とした伊勢型

２００６年５月　伊勢型の調査　（伊勢型紙資料館，鈴鹿伝統産業会館，白子山観音寺）

・鈴鹿市在住で元三重県総合教育センター所長橋本久氏を頼りに，鈴鹿市教育長へ手紙で調査依頼をする。
・鈴鹿市文化振興部文化課の宮崎哲朗氏を紹介される。宮崎哲朗氏の監督のもと，伊勢型紙資料館所蔵の伊勢型紙数百枚を撮影することができた。
・伊勢型紙保存会の会長様を初め多くの彫り師の方々，資料館を管理する方々から文献の紹介や，直接聞き取りすることができた。

○ 2006 年度まとめ

(1)いくつかの文献から，現存する型染の中で最も古い衣服は、東京国立博物館蔵の二本傘文様素襖（室町）であると思っていたが，調査した結果，これは，糊防染ではあるが，筒描き（手描き）による型染であることが判明した。染型紙を用いた型染として，現存する最も古い衣服は，室町時代の上杉謙信所用の帷子である。山形県米沢市の上杉神社に伝わる紋付き小紋帷子である。

(2)三重県鈴鹿市にて白子の伊勢型紙資料館へ出向く。鈴鹿市文化振興部文化課の宮崎哲郎氏立ち会いの下，文化財である伊勢型紙を数百枚撮影する機会を得た。伊勢型の特徴は，緻密で繊細で，伊勢型紙そのものに芸術性を帯びた作品として成り立っているが，元々は，染柄として彫られた染型紙であり，今でもそのことには変わりはない。

(3)資料館で伊勢型紙保存会会長（彫師）の方とお会いすることができ，その結果，紅型の「糸かけ」と伊勢型の「糸入れ」は同じものであると解釈していたことの誤りに気づく。

(4)沖縄県立首里高等学校染織デザイン科へ赴き，紅型の授業を参観して，小・中・高等学校で，地域教材として，伝統工芸を生かした授業を展開してみる価値を見出した。

(5)知念紅型工房へ再び訪問し，今回は，知念績元氏にお目にかかれ，直接教えをいただいた。「糸かけ」の出来る唯一の名匠である。

(6)紅型の三宗家（沢岻，城間，知念）のもう一人の城間紅型工房へ出向く。城間栄順氏の「松にかかりたる藤の文様」があり，撮影許可をもらう。

(7)清少納言の「枕草子」に，“めでたきもの”として『花房長く咲いた藤の，松にかかりたる・・・・』のくだりがある。紅型の文様に表現されており（富士栄 1999），沖縄の紅型が平安時代の本土文化の影響を受けている点で，極めて興味深い文様である。琉球舞踊古典女踊り衣裳に使われている。

(8)首里城にて琉球舞踊「柳」の舞を撮影することができた。その衣裳の紅型の文様にも，この「松にかかりたる藤」の文様が使われている。琉球舞踊古典女踊衣裳には，きまってこの文様が使われる。

(9)紅型，伊勢型，会津型の三者を比較すると，それぞれの美意識は，「色の紅型，粋な伊勢型，純な会津型」にまとめられる。

3）２００７年度

沖縄県の沖縄島，石垣島を中心とした紅型

・２００６年４月

知念績元氏（紅型三宗家の一人知念績弘氏の長男である）とお話してもらえる。このとき，鎌倉芳太郎　資料集を開いて，「糸かけ」について，教授いただく。糸かけについては，研究協力者の小林桂子氏から是非聞いておくように言われていた。

・２００５年６月，２００６年６月９日
首里高等学校染織デザイン科を訪ねる。屋良氏，友寄氏，根路銘氏から説明を受ける。
・２００７年７月　石垣へ紅型の調査
富士栄研究室卒業生で当時八重山養護学校教諭，現在糸満市西崎養護学校教諭)の知念佐和子氏を頼りに調査する。
高階章工房，ここでは，紅型の隈取りの美しさに心打たれる。
ミンサー工芸館を訪ねる。ここで新哲次氏，絹枝氏，祐二氏，大浜公江氏からご教授いただくことができた。海晒しのときには，出向いて行き，撮影の許可をいただいている。
八重山博物館を訪ねる。
八重山伝統織物会館を訪ねる。かつて六本木でお会いした松竹氏と再会する。松竹氏は織物組合理事長におなりになっていた。ここでは，ステンシルを見る事が出来た。八重山独特の機織機で綾頭（あやつぶる）と呼ぶ高機も見る事ができた。

尚，沖縄島の紅型については，２００５年から２００８年まで継続して調査を行った。２００８年５月宮古へ行き，池間吉子氏（宮古上布の人）と出会う。苧麻とラミーと上布のちがいを知った。新垣幸子氏とは，「海晒し」の撮影で石垣へ行ったとき，お会いする約束をしている。

○ 2007 年度まとめ
(1)今回，石垣市立八重山博物館へ行った時には，2000 年に展示されていた紅型衣裳は展示されていなかったが，紅型は，首里などに特別に注文して誂えたようである。他に八重山上布と芭蕉布が展示されており次の研究へと繋げることができる。

(2)石垣市伝統工芸館では，織物組合理事の松竹氏に解説していただくことができた。芭蕉布に型染（ステンシル）が一時期流行したようで，それが展示されていたのは，幸運だった。ここで，苧麻の生葉を干しているところを見ることができた。（次の研究に役立つ。）

(3)八重山の高機は，アヤツブル（綾頭）とよぶ独特な機織機を見る事が出来た。通称ミンサー織と言われているが，正確には，ミンサー文様を絣織したものである。

(4)絣織でも，八重山には，刷り込み捺染と手結い法があり，その違いがはっきりした。

(5)苧麻の生葉を干しているところを見ることができた。

(6)藍布（らんぷ）工房を案内してもらい，高階章氏と出会う。彼女の作品，紅型の暖簾（水芭蕉）を入手する。

(7)ギリシャに行く機会を得て，考古学博物館，民芸博物館，フォーク・アートミュージアムなど視察したが，型染を探すことはできなかった。文様表現は刺繍が主流である。

(8)那覇市歴史博物館１周年記念展「おしゃれ・モダン王国の技　那覇士族「貝氏」福地家伝世品」にて小紋紅型，中形，筒引き紅型を見ることができた。この時，上流階級の喪服に使われたという「水色地経緯絣木綿衣裳」を見ることができた。このことは，喪服に絣文様が使われていたとする富士栄の論文「琉球絣の現在ーその意匠と活用」を裏づける

ものであった。

(9)沖縄県立博物館・美術館が１１月１日にオープンした。中でも県立博物館所蔵の子供の紅型の3点は，いずれも年代不明，作者不明ではあるが，見事な染織である。またそれぞれ絹，麻，綿の素材が使われていて，興味深い。次の３点であるが，図録には載っていない。１「浅地稲妻に花の丸文様衣裳」（袷・絹），２「白地霞に鶴松梅楓文様紅型子供着物」（単・麻），３「段染鶴竹梅模様紅型子供着物」（単・綿）。これらを『琉球紅型』（吉岡　1980）からスキャナで取り込み，研究に役立てた。

(10)学校教育の教育現場で，地域教材として紅型を取り上げ，大学院生の島袋麻美の教育実践を指導し，教育成果を得ている。

(11)東京国立博物館に於て「国宝薬師寺展」の中で吉祥天像があり，「繧繝（うんげん）」による縁取りと紅型の隈取りとの関連性と相違点を見ることができた。常設展では，葛飾北斎が琉球八景を描いた錦絵があった。このことは，型染の原型を江戸の頃，琉球の人々は目にしたことになる。

(12)2008年3月28日　国宝薬師寺展（東京国立博物館にて）。
そこでは，国宝吉祥天像（奈良時代））の実物を見ることができた。麻布に彩色したものである。花文は，繧繝で縁取られている。繧繝とは，形の外側から内側へと同系の色を段階的に濃くしていく綵色技法のことである。実際に見ると紅型の隈取りに近い技法のようにみえる。

(13)葛飾北斎（1760-1849年）筆による錦絵「琉球八景　臨海湖静」，「琉球八景　久米村竹籬」（東京国立博物館所蔵）がある。江戸の頃，葛飾北斎が描いた錦絵を琉球の人々は目にしたことになる。錦絵は版画であり，紅型の原型となったと考えられる。

第4章　研　究　結　果

紅型の美意識は，伊勢型から生まれた江戸小紋や，浴衣の中形にみられるような粋好みの美意識とはちがう。また，素朴で力強い会津型とも異なる。

外間守善は，沖縄の造形美について次のように述べている。
「しばしば「やさしさ」，「おおらかさ」，「あかるさ」という言葉で言い表されることがあるが，‥‥それそのものが，美意識，美的造形であるとはいえないように思う。しかし，美的感覚の原質というか，美意識を生み出していくための豊かなる土壌であることは間違いない」。

沖縄は決して排他的ではない。受け入れることはする。しかし，沖縄のアイデンティティを塗り換えることはしない。それを職人気質とでもいうのか，ある種の頑固さがあるように思われる。このことが，沖縄独自の染織文化を生み出すもとになっている。

土地の風土や生活そして人間の暮らしの中から文化は生まれる。文化は美への惜しみない追求である。

沖縄は，中国，東南アジア，大和の影響を受けながらも独自の染織文化を創り上げ，染織の美学を実現してきた。紅型もそのひとつである。

紅型，伊勢型，会津型を比較した場合，「色の紅型，粋な伊勢型，純な会津型」とまとめてみた。

染型紙を彫るときの台（下敷き）は，紅型特有のルクジューである。適度な堅さと復元力があり，刃の跡があまり残らない，油分があるので動かし易く，さび止めにもなる。大きさは，縦10cm，横9cm，厚さ3cm程で，固さは固形石けん程の硬さである。その名の由来は，六条豆腐からきている。60歳を2つ重ねると120歳で長寿を意味し，縁起のよいものとされた。

伊勢型，会津型は，白地彫りと染地彫りのいづれかであるのに対し，紅型は両方がひとつの染型に存在している場合が多い。ひとつの型紙に白地彫りと染地彫りが共存することによって，明るさを増し，若々しさ，清らかさを醸し出し，紅型の美意識を生み出しているといえる。

紅型には「糸掛け」が，伊勢型には「糸入れ」が残っている。

伊勢型，会津型は、おおむね単色が多い。これに対して紅型は、[べにいりいろかたぞめ]を略して[紅型]と呼ぶように、顔料を使った多色染であり，[色差し][色配り][隈取り][二度刷り]などと多色である。

紅型は，捺染法であり，伊勢型，会津型は浸染法である。

「隈取り」のときにさす色には決まりがあるものの，全体として自由な色使いは，おおらかで明るい紅型の美意識を生み出しているといえる。

「隈取り」は他の型染めにはない，紅型特有の技法である。隈取りによって奥行きが生じ，文様を浮き上がらせ，鳥などが飛んでいるように見え，幻想的な雰囲気を醸し出す。

季節にこだわらないデザインといい，色使いといい，全ての工程を担うからこそ自由で，のびのびとした線がひけるのである。

第5章　今　後　の　研　究　計　画

琉球絣，紅型，および上布は，沖縄の染織の美を育んできた。これらの共通点は，染織の素材がからむし（苧麻）である。これまで，「織の琉球絣」と「染の紅型」を研究してきた。

鈴木牧之の『北越雪譜』には，越後魚沼の雪国の生活の風俗，暮らし，方言が記されている。越後の湿度の高い冬の雪国，同様に，湿度の高い亜熱帯性気候の八重山では，からむしの糸が切れにくい立地条件を備えているといえる。南島と雪国の全く異なる風

土の中から，八重山上布の「海晒し」，越後上布の「雪晒し」を経て上布が生まれる。その美しさと不思議さに疑問を持ち，その研究の究明を計画している。

これまで研究してきた琉球絣と紅型に加え，同様な染織素材からむしから生まれた「染と織の上布」を研究対象とし，それらの相互比較から，沖縄の染織の美を考察する。上布に関しては，八重山上布（沖縄）と越後上布（本土）の衣文化と美意識について調査研究する。

からむしに焦点を当てて，沖縄の染織の美を追究する。からむしは，「魏志倭人伝」に見る事が出来，布をなす素材としては，最も古いものといえる。「和漢三才図絵」，「吾妻鏡」，「北越雪譜」，「奥会津伝説」などの文献から上布の背景を探る。

琉球絣の研究をしていたときに，古くから日本海を通る，琉球から越後への海道があり，琉球と越後の交流があったとされる記述があった。確かに，本土の他のどこよりも，絣文様が琉球絣のそれとよく似ている。琉球と越後の関係はどうであったのか，これまでの研究では明らかにすることが出来なかった。以上の究明に向けて史実を掴みたいと考えている。

越後上布の原麻は，会津の上質のからむしである。奥会津大沼郡の昭和村で生産されている。八重山諸島の石垣市と昭和村の繋がり，からむしの生産地の共通点を調べその源流を探る。

研究成果を地域に生かした視点で教材化し，学校教育（家庭科教育等）の場で授業実践を試み，沖縄の染織文化を継承し，創造することができたらと考えている。

①石垣島で海晒しを撮影すること，②石垣島の新垣幸子氏とお会いすること，③福島県昭和村のからむし会館へ行くこと，④昭和村の酒井美智代氏とお会いすることが今年度の計画である。